

板東俘虜収容所の活動と「第九」初演

Activity in a Prisoner-of-War Camp of German Force in Bando,
Japan and the First Performance of Beethoven's No.9 Symphony in Japan

岩井正浩

Masahiro IWAI

はじめに

ベートーヴェン^(註1)作曲交響曲第9番は1824年5月7日、ウィーン・ケルントナートーア劇場で初演された。そして1918年6月1日、日本の徳島県板東のドイツ兵俘虜収容所で日本初演がされた。ただ、この初演はドイツ人によるドイツ人のための演奏であり、板東俘虜収容所関係者だけ（日本人も含む）を対象とした演奏であった。しかし日本で全楽章が演奏されたということは大きな意味を持っている。

1895（明治28）年、日清戦争で勝利した日本は清国に遼東半島の譲渡を要求。これに対しロシア、ドイツ、フランスが「三国干渉」を行った。その後北京での自国宣教師殺害事件を口実に1989（明治31）年山東半島の膠州湾を借り受けた。当時日本はイギリスと日英同盟を締結していたため、イギリスはドイツによる東洋艦隊の攻撃から自国商船の護衛を日本に求めて来た。これを中国進出の好機ととらえた日本は、その要請を受諾し、1914（大正3）年にドイツに宣戦布告、10月31日から青島のドイツ軍基地へ総攻撃を開始、日本側の圧倒的な軍事力により11月7日にドイツは降伏。ドイツ・オーストリアは210名の戦死者を出し、俘虜4,689名は日本本土に移送された。

第一次世界大戦で中国青島で敗れたドイツ兵俘虜は日本各地の収容所に収容され、その収容所での生活の一部として行われた活動に音楽があった。俘虜は収容所生活の中で楽器を練習し、様々な楽曲を彼等のために演奏した。板東俘虜収容所でその延長線に位置するのが「第九」初演であった。

神戸又新新聞^(註2)は1914年12月7日付で「青島俘虜總數 各地収容狀況（東亞時局）：青島俘虜中已我俘虜収容所に収容されたるものは左の如し」を掲載している。松山、丸龜、久留米、福岡、熊本、姫路、大阪、名古屋、東京の9カ所を掲載した後

右の外今尚青島に在りて病院に収容せられつゝある傷病俘虜將校同相當官二十四名、下士卒三百四十四名にして輸送に堪ゆるものより漸次内地に輸送せられ最近増置されたる三収容所に収容さるゝ筈にて來八日宇品着の將校同相當官十餘名、下士卒七八十名は静岡収容所に収容さるる都合なるが大分及徳島兩収容所へは現に熊本及大阪兩収容所に収容されつゝあるも

の、内より若干名宛轉送さるゝものあるべし而して以上已に收容済及今後内地に輸送さるべきものを合したる總數は左の如し 將校、同相當官=二百二十二名。下士卒=四千四百二十六名。合計=四千六百四十八名

その後、追加して12ヵ所に開設されていた收容所は、1917（大正6）年から千葉県習志野、名古屋、徳島県板東、広島県似島、兵庫県青野原、福岡県久留米の6ヵ所に統合された。板東俘虜收容所は徳島県徳島（4月9日）、香川県丸亀（4月21日）、愛媛県松山（4月23日）の四国3收容所が統合され、合計945名が1917年4月8日に開所した徳島県板野郡板東町（現鳴門市大麻町）に收容された。さらに1918年8月7日には久留米收容所からの90名を加え、1,000余名の規模となった。收容所は日本側の管理棟、兵舎8棟、將校用兵舎2棟、厨房・浴室棟3棟、病院棟、製パン所など合計54棟で構成された。

本稿は、「第九」初演が行われた徳島県板東俘虜收容所（現在の徳島県鳴門市大麻町）での俘虜の生活を概観する中で、音楽活動の延長線上に誕生した「第九」について論述する。

第1章：板東における生活概観

1-1 板東俘虜收容所新聞『Die Baracke』

板東俘虜收容所では様々な活動が展開したが、中でも新聞の発行と音楽活動は特筆される。板東俘虜收容所新聞『Die Baracke』は、四国3收容所で刊行されていた新聞である徳島俘虜收容所新聞『Tokushima Anzeiger』、丸亀俘虜收容所新聞『Das Marugamer Tageblatt』、そして松山俘虜收容所新聞『Das Lagerfeuer』がベースになっている。これらの新聞にはコンサートプログラムや批評記事が数多く掲載され、音楽がいかに俘虜にとって身近で重要な娯楽であったかということが判明する。大規模になった收容所内ではさまざまな活動が展開されていく。その中で俘虜を事実上統合していく役割を果たしたのが收容所新聞『Die Baracke』であった。1917年9月30日に第1号が発刊され2年間で合計2,720頁、発行部数は300前後に及んでいる。

『Die Baracke』をはじめとする印刷は、石版（リトグラフ）印刷と謄写版印刷を行う2軒の印刷所と製本所で行われていた。中でも謄写版印刷機による多色刷り印刷は、コンサートプログラム、絵はがき、書籍、カレンダー、画集などに及び、色彩豊かな印刷物を作り出していた。この印刷機は日本製の謄写版印刷機を改造し、使用する色の数だけ原版を作り個別に印刷することでカラー印刷を完成させている。そして線刻の印刷だけでなくベタ刷り技術も開発し、プログラム約50種類、印刷総数25,000枚にのぼった。（鳴門市 2016）

『Die Baracke』は定期購読が可能で、ありとあらゆるテーマについての実用的、学術的な記事、神社建築や伝統的な祭りから近代産業に至るまでの日本に関する詳しい論文、戦争に関するニュース、スポーツ競技、コンサート・演劇プログラム、クイズコーナー、三面記事と盛り沢山であった。「板東俘虜製作品展覧会」（1918年）は、大正7年3月に近くの公会堂と四国八十八ヵ所1番札所靈山寺を会場として開催され、農商務省官吏等県内外から大勢訪れた。ステージでは楽団演奏、演劇等が催され、出品物は絵画、写真、文具、装飾品、楽器、写真器具、各種模型、食料品など多岐にわたり、絵画だけでも200点、参考品の他は全て販売された。ポスターの意匠

は、ウィーン分離派で頻繁に用いられる3つの花輪がモチーフとなっていた。分離派メンバーの Josef Casimir Hofmann が建設したウィーンのエッセッション館にもみられ、音楽演奏や演劇活動も女声パート、女性役を男性が代役することで活発な活動を行った。

また、四国3収容所から板東に統合された1年後の1918（大正7）年8月に久留米収容所から板東俘虜収容所に送られてきた90名の俘虜のために、『板東俘虜収容所案内』（『Fremdenführer durch das Kriegsgefangenenlager Bando, Japan:Herausgegeben von der Lagerdruckerei Bando gelegentlich der Ankunft der von Kurume nach Bando verlegten Kameraden. August 1918』）を発行した。その中で『Die Baracke』について次のように紹介している。^(註3)

毎週日曜日発行の板東俘虜収容所新聞で、購読料は1月50銭であること、編集委員として、Schriftleitung: Oblt. Martin(マルティン中尉), Lt.d.R.Solger(予備少尉ゾルゲル), V.Feuerw.d.R.Rahaus, (予備火器技術軍曹ラーハウス)、Vfw.d.R.Möller(予備軍曹メラー)、Uffz.d.L.Mahnfeldt(後備伍長マーンフェルト)

が担当していること、書籍印刷一製本、Die Lagerdruckerei(収容所印刷所)

『ディ・バラッケ』（第1巻）解説では次のように述べられており、四国3収容所の編集委員が共同で新聞編集・発行に関わっていたことが判明する。

1917年9月30日付けで週刊収容所新聞『バラッケ』第1号が発刊される・冒頭に6名の編集委員の名が挙げられているが、そのうちマルティーン、ゾルガー、ゴルトシュミットの3名は『陣営の火』の編集委員であった。ラーハウスはおそらく『徳島新報』からの委員であろうと推測される。『バラッケ』は今回翻訳が出版される第1巻26号604頁のあと、第2巻27号、第3巻26号が、通して1年6カ月の間毎週発行された。1919年4月号から9月号までの6冊は月間である。まる2年間に発行された『バラッケ』は合計2,720ページに上る。(後略)

(鳴門市 1998 Xxii-Xxiii)

また「創刊の辞」では

(前略) 報道のための場所として、有刺鉄線の内側の感動的な出来事についての折にふれての発言の場所として、記憶する価値があると思われるものを記録する場として、『バラッケ』を創刊するのは、真の必要を満たすことになるだろうと信じている。この基本方針を明確に認識しながら、われわれはあまり狭苦しく特定の方針に縛られたくない。自分達が錆び付くのを防ぐあらゆる努力をすることを希望し、そしてドイツの未来のうち、板東の俘虜であるわれわれが責任を負っている小さな一部に貢献することをも望んでいるのである。『バラッケ』が、われわれの収容所の生活を忠実にりっぱに描きだすことができるかどうかは、仲間の共同作業にかかっている。(中略) 投稿は印刷所へ届けるか、または下記の編集部のメンバーのうちのだれかに直接手渡して下さるようお願いしたい。(後略) (鳴門市 1998 10)

この中の「自分達が錆び付くのを防ぐ」とは、俘虜生活が日々行動する時間をもてあます暇に襲われ、目標や希望を喪失する。そのためにスポーツやコンサートなどの文化活動を先導する役割をこの『ディ・バラッケ』が担うとの宣言である。

徳島県は2008年3月28日に『歴史資料：板東俘虜収容所関連資料』として県指定を行っている

る。^(註4)その後、徳島県と鳴門市は「ユネスコ「世界の記憶」」^(註5)の申請を行う準備を行っている。その内容は、印刷物351点、手書き資料8点、写真143点、書簡99点、工芸品5点、その他文字資料16点である。印刷物はタイプライターで作られたもの1点を除きその他はすべて紙にインクで印刷されたものである。中でも102点のコンサートプログラム、演奏を含んだ32点の演劇プログラム、「ドイツの歴史と芸術」(34回連載講演)、1918年3月30日の「バッハ、ヘンデル」、同年4月17日の「J.S. バッハのブランデンブルク協奏曲」、5回のシェクスピア論、そして「L.v. ベートーヴェン第九交響曲解説 共演者のために」、さらには6月1日の「第九」初演直前の5月30日に行われたヘルマン・ボーネル(イニシャルP.Sq)^(註6)による「ベートーヴェンの第九交響曲：シラー・ベートーヴェン・ゲーテ」と題する2度の講演と、『ディ・バラッケ』に掲載など、音楽活動のプログラムや批評は『Die Baracke』紙上で重要な役割を担っている。(鳴門市 2001 184-191. 201-210) この中でボーネルは様々な作曲家を論じつつ、

ベートーヴェンの最も大いなる信条は、この歌の表明するものと一つに融け合う。言葉の大劇作家が、音の大劇作家を魅き寄せたのである。ところでシラーの側でも、このように高貴なものを語るためには、言葉は音楽にならなければならないと感じていたであろう。他方ベートーヴェンは、音楽は言葉に到達しなければならないと感じていた。しかし彼が折らなかつたのは、過度に音楽的なものへと解体してしまった詩節である。明らかにベートーヴェンは、結局それは言葉の側にも出来ないことであるが、もし言葉にそれが可能だとすればシラーの言葉をおいてほかにないと感じていた。この詩句の昂揚する情熱、炎のような力、強い輪郭、太陽のような壮麗さが、偉大なルーベンスの同国人ベートーヴェンを魅了した。しかしただそれだけではない。彼の直接的、個人的な苦悩と生活、特に次第に悪化する難聴、そこから生ずる孤立化は、彼の心の中に友情と協同、そして歓喜を求めるシラーと同じ叫びを呼び起こした。ベートーヴェンの生涯もまた力闘・闘争・克服の連続であって、プロメテウス像の意味を彼もまたいち早く認識していた。(鳴門市 2001 189)

と述べている。(部分引用)「第九」に関しては『L.v. ベートーヴェン第九交響曲解説 共演者のために』(謄写版印刷 3枚6ページ)も発行されている。

さらには日本の祭りについて『Tokushima Anzeiger』は、徳島の阿波踊りや天神祭、正月、盆行事が、5月31日にはKurt Meißner二等海兵によって「日本の日常生活と祭り」を掲載している。(岩井 2010 21-23)

1-2 「多種多様な職業と技能」

板東俘虜収容所では、スポーツ・文化活動と並行してタパタオ^(註7)に代表されるように多種多様な職業と技能の駆使が展開されていた。

職業軍人は99名、機械・金属加工職148名、食料・衣料・生活必需品製造職97名、土木・建築・木工職96名、農林畜産関係57名、書籍出版職10名、商業関係303名、法律家6名、教職14名、宣教師8名、官吏21名、そして上海音楽院出身の音楽家数名など多種多様であった。(鳴門市 2003 26) そのため新聞発行、農業指導、パン・ケーキ作り、オーケストラ、合唱などの音楽活動が大

きく花咲くこととなった。日本政府もドイツの進んだ技術を吸収するために様々な処遇を行い、日本の農業など産業発展に大きく寄与した。

青島戦に参加したドイツ兵は、その約3分の1が日本や中国・青島を含む東アジア周辺地域居住者で、多種多様な職業に従事する民間からの招集兵や志願兵であった。ドイツ兵俘虜は、農業・工業などの各産業における最新の技術・知識を持っており、日本はこの現状に早くから注目し、ドイツ兵俘虜による技術指導を目的とした俘虜労役が全国の収容所で実施された。板東俘虜収容所でも実際、地元の工業学校での技術指導や、牧舎の建築・運営、西洋野菜の栽培などについて地元農家に対する農業指導が行われていた。

また、ドイツ兵俘虜たちは様々なスポーツ、語学や各種講演会などで自己啓発に努めた。さらに板東俘虜収容所内でソーセージやパンなどの食料品や家具などを製造し、展覧会で公開して地元の人々にも提供し交流した。^(註8)

製パンに関して『板東俘虜収容所案内 日本』は次のように紹介している。

Bäckereischuppen. 製パン所倉庫 (*Sergeant Hoffmeier* ホッフマイアー軍曹)

として、これは収容所製パン用の物資保管のための倉庫で、ここで内務班にパンを引渡す。

その方法は、平日は17:00—17:30、日曜は11:00-11:30。

Lagerbäckerei(収容所製パン所)。ここは食料としてのパンの製造。パンと丸い小型のパンの販売。終日営業。^(註9) (*Fremdenführer 1918 13*)

としている。また喫茶店GEBA(ゲーバ)では、お勧め品として有名なケーキ、紅茶とコーヒーのクッキー、全ての祝祭用のケーキ、ライ麦パンを提示し、11:30—15:00まで販売、と紹介している。全く見知らずの土地に送られてきた久留米の俘虜にとって、これらの案内は心強かったことだと思われる。パンやケーキばかりではなく、ドイツ兵俘虜が伝えた技術は、家畜の飼育、バター・チーズ製造、製パン、西洋野菜、農産物加工、ハム・ベーコン製造、洋酒、動植物の採集と標本作り、建築の製図・設計、ケーキ等に及んでいる。^(註10)

第2章：「第九」誕生と特色

2-1 「第九」の特徴

ベートーヴェンは1815年10月19日ウイーンから、Anna Maria von Erdödy伯爵夫人に宛てた手紙で、

無限の靈魂をもちながら有限の存在であるわれわれは、ひたすら悩みのために、そしてまた
 歓喜のために生れてきているのです。また、優れた人々は苦悩を突きぬけて歓喜を勝ち得る
 のだ、と言っても間違いないでしょう。(後略)

取り急ぎあなたの忠実な友 ベートーヴェン

と述べている。(小松 1982 27-29)

「歓喜の歌」のDurch Leiden Freudeは、Romain Rollandが『ベートーヴェンの生涯』の最後で、またErnst Bertramは、1927年にケルン大学で行った「ベートーヴェン」講演の中でWir Endliche mit dem unendlichen Geistについて、紹介している。(ロマン・ローラン 1960 50)

「第九」の「歓喜の歌」至るまでに、ベートーヴェンはいくつかの旋律を残している。1809年の「合唱幻想曲」(op.80)や1810年の「彩られたリボン」(op.83)には、その旋律線を垣間見ることが出来る。

初演は総監督がベートーヴェン、合唱とオーケストラはそれぞれケルントナートーア劇場合唱団、ケルントナートーア劇場管弦楽団、そしてピアノ補助演奏が付いていた。合唱編成には数多くのアマチュア参加していた。「第九」の特徴については以下の12点を挙げる事ができる。

- ①長大な構成。(約1時間10分：指揮者で異なる)
- ②第1楽章：冒頭テーマが、ニ短調のe-a、a-eと三和音の中間音抜き下降。
- ③第2楽章：スケルツォ、第3楽章にアダージョを配置。
- ④第2楽章：ティンパニのオクターブ(f-f)打奏。
- ⑤第3楽章：ナチュラルホルン(バルブ無)による4番ホルンの使用(77～)
- ⑥第4楽章：低音用のファゴットを旋律奏に(271～)。コントラファゴット使用。
- ⑦第4楽章：マーチとしてのトルコ軍楽(331～)＝当時、オスマントルコ軍楽はヨーロッパの作曲家に影響を与えていた。[alla Turca]またティンパニやシンバルをはじめとする楽器も以後の楽器に大きな影響を与えている。オスマン・トルコ軍楽(メヘテル・ハーネ)は、ズルナ、ボル(トランペット)、ナッカーラ(小型鍋型1対の太鼓)、キョス(馬の背に付ける大型鍋型1対の太鼓)、ダウル(両面大太鼓)、ダイレ(梓太鼓)、ズィル(シンバル)、など現代のティンパニ、シンバル、トランペット、オーボエの原型で構成されていた。
- ⑧第4楽章：合唱と旋律の大衆化＝「第九」は多くの合唱メンバーが必要とされた。出演者に対する謝礼を考慮するとプロの声楽家ばかりでは赤字になる。そのためアマチュアを入れ、彼らが歌い易い旋律を作曲した。これは民衆のための音楽というメッセージも込められていたと考えられる。
- ⑨第4楽章：二重フーガ(655～)＝昂揚感を高める手法。「Missa Solemnis」(op.123)でも使用。
- ⑩第4楽章：声楽高音域のピッチ＝二重フーガ以降、ソプラノソロはh、テノールソロはb。合唱はソプラノがaのロングトーンで歌われる。鳴門市ドイツ館には地元民がドイツ兵俘虜から譲り受けた「鈴木製」のヴァイオリンが保存されている。3丁のヴァイオリンとそのケースに所蔵されていた調子笛(Violin Tuner)はA=432Hz、また1815～21年のドレスデン歌劇場の音叉(A=423.7 Hz)は現代のA=442 Hzとは20 Hz近くも低く、最高音は約半音低いピッチで、現在よりは歌いやすかったと思われる。
- ⑪第4楽章：730小節の合唱パートに現れるバスからの十二の音の連続。これは十二音技法の先駆けとも思われ、ベートーヴェンの先進性・先見性がみとれる。

fis-c-a-b-e-cis-d-es-g-e-f-fis-b-g-gis-a-e-cis-h

- ⑫第4楽章：四分音符連続と音域の狭さ→日本の1音1音節に近い。日本には歌曲《荒城の月》、《春の小川》など四分音符の連続で歌われる歌が多い。「歓喜の歌」も日本人には1音1音節のリズム感で歌われる傾向が強い、旋律が簡易であることが日本での「第九」普及の

一因と考えられる。

2-2 シラー(Johann Christoph Friedrich von Schiller)の詩の改編

シラー夫人への手紙(1793.1)：シラーが「歓喜への頌歌」を書いたのは1785年。ロマン・ローランはベートーヴェン改編のシラーの詩について次のように解説している。

第一、第二、第三ストローフ(岩井註：以下S表示) — (岩井註：以下→表記) 第四Sの結尾句→第一S、第一Sの結尾句、第三Sの結尾句→第一Sの結尾句の前半とともに第一Sの前半→第三Sの結尾句の第一行から第三行→第二S[第一Sの誤り]の結尾句の後半→第一Sの初めの二行を短縮したものと後半全部→第一Sの結尾句→第一Sの結尾句の前半→第一Sの第一行と第二行、および終結としてふたたび第一Sの第一行。(ロマン・ローラン 1967 65-66)

1818年には現在の第1楽章に当たる素材がスケッチ帳に書きこまれ、1824年に完成。100名近い合唱とオーケストラが集められた。冒頭のバリトン・ソロはベートーヴェン自身の作詩だと言われている。

“O, Freunde, nicht diese Töne! Sondern laßt
uns angenehmere anstimmen, Und Freudenvollere. [櫻井 2006 80]

第3章：日本人と「第九」

3-1 板東俘虜収容所の音楽活動：ハンゼン^(註11)とエンゲル^(註12)

板東俘虜収容所での音楽活動は、統合されるまでの四国3収容所(徳島、丸亀、松山)における活動が大きな支えになっていた。中でもハンゼン指導による徳島収容所、エンゲル指導による丸亀収容所での音楽活動はの板東収容所で中軸として機能した。ハンゼン率いる徳島オーケストラは15回、その後M.A.K.(Matrosen-Artillerie-Detachment Kiautschou 膠州海軍砲兵大隊)と名称を変更し、合計35回開催している。そして1919年12月7日の「さよならコンサート」で、1917年4月17日の第1回コンサートから2年8ヵ月の演奏活動を終えた。

また管楽器編成(吹奏楽)では、M.A.吹奏楽団という名称で活動している。1918年6月1日に演奏された、ベートーヴェン作曲《交響曲第九番》の全曲演奏もハンゼン指揮の徳島オーケストラ第2回シンフォニー・コンサート(通算第18回)によるものである。

一方、エンゲルは、丸亀時代の1915年に「エンゲル・オーケストラ」を結成、1917年板東に移された後、松山からの俘虜を加え団員は45人になった。1917年5月13日の第1回コンサートから1919年12月7日までの2年8ヵ月の間に、オーケストラコンサート(17回)、シンフォニーコンサート(3回)、「ベートーベンの夕べ」(2回)、ウィーンアンサンブル(2回)で指揮をとった。さらにM.A.K.オーケストラとの合同演奏会を2回(1919年11月10日、12月1日)に開催している。松江豊寿所長の理解もあって徳島市内で出張指導をするようになり、「エンゲル音楽教室」を開設、日本人に西洋音楽の手ほどきを行った。^(註13)

音楽演奏団体はさらにさまざまな団体が結成され、活発な活動を繰り広げた。それらはモルト

レヒト (Paul Moltrecht) ・マンドリン楽団 (2回)、シュルツ (Adolf Schulz) ・オーケストラ (3回)、シュルツ吹奏楽団、ⅢSB吹奏楽団 (6回：帰国船での演奏を含む)、「室内楽の夕べ」 (7回)、「歌の夕べ」 (2回)、ⅢSB第六中隊による軍楽隊儀礼演奏、モルトレヒト男声合唱団 (2回)、ヤンセン (Peter Janssen) 収容所合唱団、「朗読と音楽の夕べ」、そして市民に公開された「和洋大音楽会」などである。この和洋音楽会では「式三番叟」、「元禄花見踊」などとともエンゲルのヴァイオリンのピアノ伴奏を日本人田中博が行うなど日本とドイツの友好音楽会であった。

【図1：和洋大音楽会ポスター (鳴門市ドイツ館提供) 巻末】

【図2：和洋大音楽会プログラム (鳴門市ドイツ館提供) 巻末】

その他にも男性だけで演じられたシラー作『群盗』、『シャーロックホームズ』、ゲーテ作『エグモント』や喜劇、人形劇など (オーケストラ演奏も付随) の公演が行われた。わずか2年7ヵ月の間にこれほどの音楽活動が行なわれたことは驚嘆に値する。

音楽活動は音楽表現にとどまらず芸術演も行なわれている。『Die Baracke』には講演記録が掲載され、コンサートプログラムの掲載、演奏会評そして講演内容などが語られている。この新聞活動が俘虜の音楽活動を大きく支えた。

3-2 板東収容所での「第九」初演

徳島県板東俘虜収容所での「第九」初演の前後には様々な活動が行われている。ハンゼンが指導していた徳島オーケストラは、板東での「第九」全楽章初演2年前の1916年8月20日、統合前の徳島俘虜収容所における第50回コンサートで「第九」の第4楽章を演奏している。『徳島アンツアイガー』第3巻15号 (1916年9月16日)

十分とは言えないが、この時期になると次第に2管編成オーケストラの形を整えてきていた。ハンゼンはピアノ曲の編曲やスコアをこの編成用に編曲することも行っていた。ベートーヴェン《第九交響曲》における第4楽章のソプラノ、アルトの女声ソロおよび女声合唱パートの男声パートへの編曲などもハンゼンによるものと考えられる。

板東での初演時 (1918年6月1日) に演奏されたハンゼン指揮、徳島オーケストラ第2回シンフォニー・コンサート (通算18回) は、ソリストおよび合唱団80名が全員男声、ファゴットの代用としてオルガンを使用して行なわれた。

[1918年6月1日初演]

ベートーヴェン交響曲第九番

徳島オーケストラ第18回コンサート (第2回シンフォニー・コンサート)

指揮：Hermann Richard Hansen＝海軍膠州派遣砲兵大隊第3中隊軍楽隊長・軍楽曹長

独唱：Hermann Wegener＝海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵

Herbert Steppan＝海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵

Franz.Frisch, =海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵

Johann.Koch=海軍歩兵第3大隊第7中隊・後備伍長

第1楽章：アレグロ・マ・ノン・トロポ／第2楽章：モルト・ヴィヴァーチェ

第3楽章：アダージョ・モルト・エ・カンタービレ／第4楽章：プレスト

1918年6月1日 土曜日（公開総稽古 5月31日 金曜日）夕方6時30分

煙草吸わないように！ 板東収容所印刷所で印刷 [林啓介 1993 92-94]

この初演のポスターは、ベートーヴェン・フリーズを模したものであった。1902年の第14回ウィーン分離派展では、創造精神の化身ベートーヴェンのオマージュがテーマとなった。Gustav Klimtは1897年「オーストリア造形芸術協会」（ウィーン分離派 Wiener Sezession）会長に就任。1902年に北ドイツのMax Klinger制作のベートーヴェン像が完成。分離派はそれを祝福するためクリンガーのベートーヴェン展として「第14回ウィーン分離派展」を開催。会場の中央にクリンガーのベートーヴェン像を置いて、周囲を分離派の画家や彫刻家が様々に装飾するというものであった。Gustav Mahlerは「第九」を金管楽器用に編曲し像の前で演奏した。クリムトはベートーヴェンの「第九」をモチーフとした長さ約30メートル、高さ2メートルの3面にわたる壁画を制作。これが「ベートーヴェン・フリーズ」と呼ばれた。

【図3：初演ポスター（鳴門市ドイツ館提供）巻末】

【図4：初演プログラム（板東収容所印刷所発行 1918。鳴門市ドイツ館提供）巻末】

6月1日の「第九」初演直前の5月30日に行われたHermann Bohner水兵（イニシャルP.Sq）による2度にわたる「ベートーヴェンの第九交響曲：シラー・ベートーヴェン・ゲーテ」と題する講演が『ディ・バラッケ』へ掲載された。（Nr.10：6月2日／Nr.11：6月9日）、「第九」のコンサート評は特に『ディ・バラッケ』には掲載されていないが、ヘルマン・ハーケ俘虜がドイツの母親に宛てた葉書で次のように評している。

お母さん！雨季が始まった所で、約6週間続き、陰鬱で雨模様の天気とその特色です。先週の土曜日にはベートーヴェンの第IXの演奏がありました。演奏は大成功でした。特に第3楽章には惚れぼれしました。なんとも言えない安らぎ、慰めが流れ出て来るのです。私は元気です。ヴィルヘルムはもうスイスに着きましたか。心からの挨拶を以て。

あなたの ヘルマン ハーケ^(註14)（ヘルマン ハーケ 1918）

これは希少な「第九」に関するコンサート評である。

3-3 徳島以降の「第九」

福岡県久留米収容所でも板東での「第九」初演1カ月後の1918年7月9日、シンフォニー・オーケストラが第4楽章を除き、第1→3→2楽章の順に演奏している。その評判はよかったようで1919年12月3、5日に再演されている。特に12月3日には久留米高等女学校の講堂で行われ、第2、3楽章が演奏され久留米市民が鑑賞している。さらに12月5日には実践学友協会コンサート

として全楽章が演奏されている。(久留米市 1999 75-76)

混声合唱での日本初演は1924(大正13)年11月29,30日に東京音楽学校奏楽堂において同校第48回定期演奏会で、指揮はGustav Kron、独唱者は長坂好子、曾我部静子、澤崎定之、船橋榮吉という日本人によるものであった。(『東京芸術大学 1999 581-582])

東京日日新聞(大正13年11月25日)は「初めて演奏される交響楽 クローン教授が指揮で二百餘名」として次のように紹介している。

(前略) 右のシンフォニーは、合唱付きの管絃樂で難曲中の難曲と云はれ歐米諸國でも極めて稀にしか演奏されないものゝ由で、樂士は少くも五十人以上、合唱團百餘人を要するといふ静肅から莊嚴へ雄大へと轉じて行く傑作だと、上野音楽學校でもこの春から、クローン教授の指揮の下に同校の教授講師及び生徒等二百餘名が猛練習を重ねて來たもので、この演奏は日本では最初の試みである事とて、多大の興味と期待とを以て待たれてゐる。

(『東京芸術大学 1999 587])

指揮者を除く混声合唱とソリスト、そしてオーケストラが日本人であるということでは日本初演である。ベートーヴェン生誕100年の1927年5月3日には、新交響樂團(新響)が第2回演奏会を開催、これ以後毎年新響が演奏することになる。1928年には国立音楽大学の前身である東京高等音楽院が1928年にN響と共演、1930年2月22日の新響第64回定期演奏会では近衛秀磨指揮、東京合唱団による全員日本人の初演奏が実現し名実ともに日本の「第九」が誕生する。

1936年11月17日、関西で「第九」が初演された。「京都大学音楽部創立20周年記念ベートーヴェン「第九交響曲」演奏会」として京都宝塚劇場で、Emmanuel Leonievich Metter指揮、独唱は永井八重子、加藤千恵、水野康孝、藤堂顕一郎、そして大阪音楽大学の前身である大阪音楽学校生徒による合唱で行われた。(大阪音楽大学 1970 257)

「第九」が与える感動は、国家主義に利用されるという数奇な運命も背負っていた。1936年開催のベルリンオリンピックではナチスのプロパガンダに利用され、1942年4月のナチス主催の總統誕生日前夜祭では、Wilhelm Furtwänglerが「第九」を指揮をした。日本でも1940年(紀元2600年祝賀行事の年)12月31日(大晦日)22時30分から、1943年11月28日には3日後の学徒出陣のために特別放送された。鈴木叔弘は「暮れの《第9》のもう一つの原点 出陣学徒と平和の祈りの系譜」として次のように論じている。

東京音楽学校の壮行会は昭和18年12月に開かれ、奏楽堂(現・旧奏楽堂)で職員・生徒全員が集まり、第4楽章のみが演奏された。器楽科・声楽科の生徒が共に演奏できることから《第9》が選曲されたという。翌19年8月6日の東京帝国大学の壮行会は、法文経25番教室で開かれ、第4楽章のみが演奏された。主催は法文経3学部会で、「最後に至高の名曲《第9》を日本交響樂團(現・NHK交響樂團)で聴いて悔いなく出陣したい」という学徒の要望から実現した。(櫻井 2006 234)

日本交響樂團(42年に新響が法人化)公演は戦時中も行われた。戦後になると、1945年12月30日、Józef Rosenstockが指揮した「第九」がラジオ第一放送で全国に放送され、大晦日公演は1946年以降に定例化する。「第九」は合唱出演者が多く客席が満席になるという利点があり、戦後次

第に「第九」が様々な地域で歌われるようになる。1972年1月19日には欧州議会閣僚委員会が「欧州の歌」として公式に発表。1985年には欧州共同体（現在の欧州連合EU）が共同体の歌として決議した。

1983年、「大阪城400年祭」を契機に大阪城ホールを会場とした「サントリー1万人の第九」が開始され、「第九」の大衆化がさらに進む。NHKは1986年10～12月に「趣味講座：第九をうたおう」を放映、1989年には「全日本第九を歌う会」が結成される。

記憶に新しいのは、1989年12月25日 Leonard Bernstein 指揮、東西ドイツのオーケストラ、合唱団、独唱者による「ベルリンの壁崩壊記念コンサート」で演奏された「第九」である。さらに2017年4月1日には公益財団法人がん研究会企画の「がん患者さんが歌う春の第九チャリティコンサート」が、日本フィルハーモニー、山田和樹指揮で東京オペラシティにて開催され、患者とその家族145人がパート入り乱れて合唱した。

おわりに

板東俘虜収容所に収容された約1,000余名の俘虜は、多様な文化・スポーツ活動を展開し、日本に多大な影響を与えた。それらは「第九」の初演をはじめとする音楽活動、『Die Barache』発行と印刷技術、パン・ケーキ製造技術、農業指導など当時の日本が吸収するに値するものであった。これらの活動を支えたのが松江豊寿所長と高木繁副官である。板東俘虜収容所は全国6カ所の収容所の中でも俘虜に対して寛容であったと言われている。それは1912（明治45）年に日本も批准した「第二ハーグ条約」における俘虜の人道的待遇、日本の国際的信用と評価を意識した対応でもあった。

解放後の俘虜たちの日本での活動は、日本にとって大きな影響をもたらした。その一つの例が神戸・大阪にゆかりのある俘虜たちの活動で、以下はその一部である。

ヘルマン・ボネル（Hermann Bohner 1884-1963）＝「ベートーヴェン、シラー、ゲーテ
第九交響曲に添えて」講演。解放後、大阪外国語学校教授。日本で他界。

バウムクーヘンのカール・ユーハイム（Karl Juchheim 1889-1945）＝22歳にドイツの租借地
青島でジグス・ブランベルグ経営の喫茶店に就職。翌年自らの喫茶店「ユーハイム」を
開店。1920年、神戸に移転開店。

カール・ビュティングハウス（Karl Büttinghaus ?-1944）＝日本女性と結婚し1924年に東京
で最初のソーセージ工場・店。後に神戸に進出、44年に死亡。45年に空襲で店舗焼失。

ハインリッヒ・フロイントリーブ（Heinrich Freundlieb 1884-1955）＝愛知県半田町の敷島
製粉に技師長として迎えらる。1923年に神戸北野ハンター坂近くに「ジャーマン・ホーム・ベーカリー」開店。1999年、中央区生田のユニオン教会跡に移転。NHK・TV「風見鶏」
に登場。^(註15)

俘虜たちは日本文化にも関心を示していた。クルト・マイスナー（Kurt Meißner 1885-1976）は『Sechzig Jahre in Japan』を、ジークフリート・ベルリーナ（Dr.Siegfried Berliner 1884-1961）は東大法学部外国人教師となり『日本の輸入貿易の組織と経営』を著わしている。（岩井

2013 13-18)

本稿における俘虜の階級などの情報は瀬戸武彦「青島（チンタオ）をめぐるドイツと日本（4）（5）独軍俘虜概要 高知大学学術研究報告 第50巻（2001年）、第52巻（2003年）を引用した。瀬戸は「俘虜」の使用について「第一に日本が最後通牒を発して戦闘国としたのはドイツであったことによる。（中略）第二に青島を含む膠州湾租借地はドイツの保護領であり、そしてなによりも青島をめぐる戦争は「日独戦争」の語をもって表記されることが通例であることによる」（瀬戸武彦2001 58）としている。

なお、「第九」の楽曲分析については、紙面の都合もあり他の機会に委ねる予定である。本稿は徳島県文化財保護審議委員在任中に担当した徳島県指定有形文化財『歴史資料板東俘虜収容所関係資料』（2008年）指定、および現在の『板東俘虜収容所関係資料』ユネスコ「世界の記憶」検討委員会委員での活動にも基づくものである。本稿における資料掲載に関し鳴門市、鳴門市ドイツ館に御礼申し上げる。

[註]

註1：Ludwig van Beethoven(1770-1827)。

註2：神戸又新日報=1884（明治17）年第1号創刊。第2次世界大戦時、新聞統制により兵庫県では神戸新聞一紙に限定された。

註3：鳴門市ドイツ館蔵

註4：『歴史資料：板東俘虜収容所関連資料』徳島県指定 筆者担当。

註5：[ユネスコ「世界の記憶」国際登録簿（案）「板東の記憶：板東俘虜収容所関係資料」]。筆者も委員として参画。

註6：Hermann Bohner 海軍歩兵第3大隊第6中隊・第2歩兵。「宣教師」

註7：青島の中国人商店街「大鮑島」（タアパオタオ）にちなんで作られた80軒の手作り小屋。（鳴門市 2003『どこにしようと、そこがドイツだ』p54）

註8：俘虜が製作した作品の出品は1918年3月8日～19日にわたって板東公会堂と四国霊場第一番札所霊山寺を会場とした「俘虜製作品展覧会」に出品された。

註9：Lagerbäckerei(収容所製パン所)。鳴門市教育委員会2012参照。

註10：藤田只之助が収容所で製パンの技術を学んだ俘虜はハインリヒ・ガーベル（Heinrich Gabel）で、製菓・製パンの中心的役割を果たした。藤田はその後徳島市内でパン屋「ドイツ軒」、パンと喫茶の「ドイツ軒出張所」を開業。（瀬戸武彦2001 77）。

註11：ハンゼン（Hermann Richard Hansen）海軍膠州派遣砲兵大隊第3中隊軍楽隊長・軍楽兵曹。徳島収容所、板東収容所での「徳島オーケストラ」を指導。

註12：エンゲル（Paul Engel）ヴァイオリニスト、指揮者。更には『青島の戦士』や『シュテッヒャー大尉行進曲』を作曲。海軍歩兵第3大隊第7中隊・2等歩兵。元上海居留地工部局音楽隊員

註13：立木香都子『わたしの写真館』（日本放送出版協会 昭和55年。1980年4月7日～1980年10

月4日放映のNHKドラマのモデル)によると、「父が組織していた「エンゲル音楽団」で、団員は、父(岩井註:立木真一)を中心にした徳島の洋楽愛好家、沖野正、大塚公、田所栄治、角山良昭という方々、それに板東町にいたドイツの捕虜の方が入って指導をしてくれている。」(p.61)

註14: Hermann Hake. 海軍歩兵第3大隊第6中隊・副曹長。板東では第2ヴァイオリンのレッスンを受けオーケストラに参加。

註15: 名古屋の敷島パンに関しては校條善夫氏による「名古屋俘虜収容所」覚書『「青島戦ドイツ兵俘虜収容所」研究 創刊号(改訂版)「青島戦ドイツ兵俘虜収容所」(研究会 2003年)、および第2号「名古屋俘虜収容所覚書Ⅱ」(同 2004年)に詳しい。また大阪俘虜収容所に関しては「大阪俘虜収容所の研究」(大阪俘虜収容所の研究会・他 2008)参照。

[参考文献]

- 鳴門市 2016 ドイツ展出典内容「収容所印刷所」芸術・文化を愛するドイツ人。
- 鳴門市ドイツ館史料研究会 1998『ディ・バラッケ』第1巻。鳴門市 Xxii-Xxiii/10
- 鳴門市ドイツ館史料研究会 2001『ディ・バラッケ』第2巻。鳴門市 201-210/189
- 鳴門市ドイツ館史料研究会 2003『どこにしようと、そこがドイツだ』鳴門市。54
- 鳴門市教育委員会 2012『板東俘虜収容所跡調査報告書』鳴門市教育委員会
- “Fremdenführer” Herausgegeben von der Lagerdruckerei Bando 1918 13
- 岩井正浩 2010「四国3収容所におけるドイツ軍俘虜の音楽活動」藤井知昭・岩井正浩編『音の万華鏡・音楽学論叢』岩田書院。21-23
- 小松雄一郎 1982 翻訳『新編ベートーヴェンの手紙 下』岩波書店。27-29
- ロマン・ローラン 1960 片山敏彦訳「ベートーヴェンの生涯」『ロマン・ローラン全集13 伝記1』みすず書房。50
- ロマン・ローラン 1967 蛭原徳夫・北沢方邦訳『ベートーヴェン第九交響曲』みすず書房 65-66
- 岩井正浩 2011「歴史資料『板東俘虜収容所関係資料』にみるドイツ軍俘虜の音楽活動」愛知淑徳大学論集—教育学研究科篇 創刊号。愛知淑徳大学論集編集委員会。
- 岩井正浩 2013「七夕。星祭り：元ドイツ兵俘虜の日本文化論」愛知淑徳大学論集—教育学研究科篇 第3号。愛知淑徳大学論集編集委員会。
- 富田弘 2006 『板東俘虜収容所』財団法人法政大学出版会。168-172/191-198
- 櫻井知子 2006 企画・編集『第九 歓喜のカンタービレ』株式会社ネット武蔵野。80/234
- 『徳島アンツアイガー』1916 第3巻15号(1916年9月16日)。
- ヘルマン ハーケ 1918 (38-53—板東18 葉書 1918年6月10日)。
- 瀬戸武彦 2001「青島(チンタオ)をめぐるドイツと日本(4)(5) 独軍俘虜概要 高知大学学術研究報告 第50巻。高知大学。66 /73/77/82-83/89/95/104/107/120/134
- 瀬戸武彦 2003「青島(チンタオ)をめぐるドイツと日本(4)(5) 独軍俘虜概要 高知大学学術研究報告 第52巻。高知大学。39/138-139/141

久留米市教育委員会 1999「久留米俘虜収容所」『久留米市文化財調査報告書第153号 久留米俘虜収容所 1914～1920』久留米市教育委員会。75-76

林啓介 1993『「第九」の里 ドイツ村』井上書房 92-94

東京芸術大学百年史編集委員会 1990『東京芸術大学百年史演奏会篇第1巻』音楽之友社。581-582/587

大阪音楽大学音楽文化研究所『大阪音楽文化史資料 昭和編』1970 大阪音楽大学。257-258

大阪俘虜収容所研究会・他 2008『大阪俘虜収容所の研究』大正区役所。254

校條善夫 2003「名古屋俘虜収容所」覚書『青島戦ドイツ兵俘虜収容所』研究 創刊号（改訂版）
青島戦ドイツ兵俘虜収容所研究会 37-39

[図1～4 鳴門市ドイツ館提供]



図1 和洋音楽会ポスター

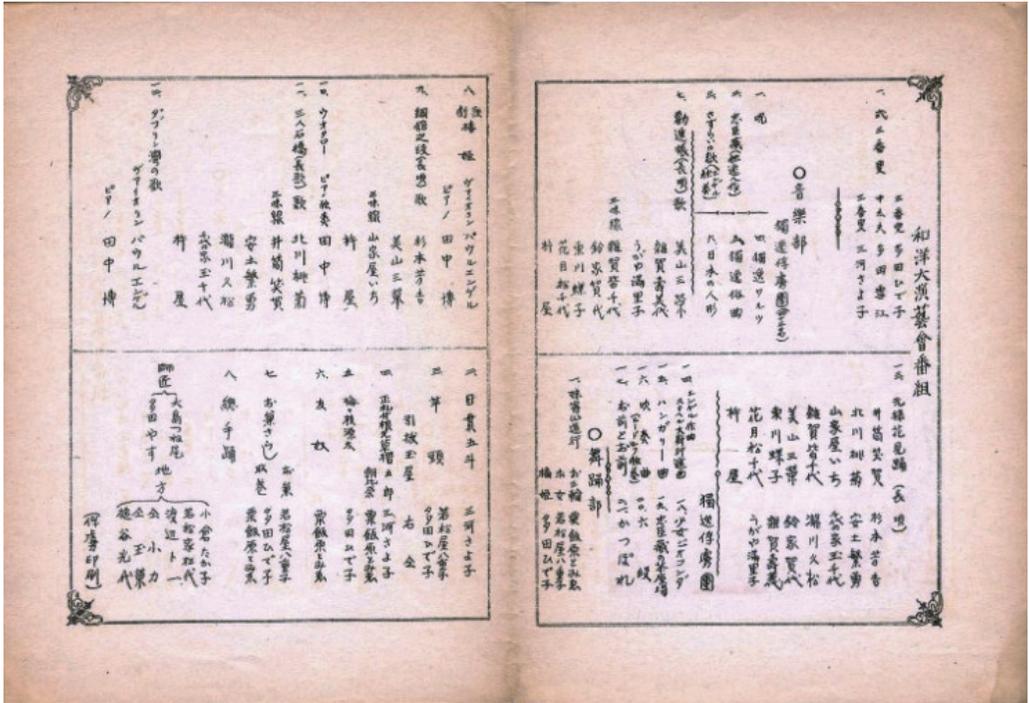


図2 和洋音楽会プログラム



図3 「第九」初演ポスター



図4 「第九」初演プログラム